



硫黄島

坑野御前(アナノゴゼ)・穴の浜

三島村の各島には「うつぼ舟漂着譚」と呼ぶ日本の伝承と同様の民話が残っている。それは海の向こうから神が来る話で、黒島には昨年紹介した空御前(ウツロンゴゼ)。竹島には福度様(フツド)。そして、硫黄島には坑野御前(アナノゴゼ)という民話がある。

昔、長濱家の太夫(「たゆう」神職を担う人)が、穴の浜(A)へ清めのための潮水を汲みに行ったところ、髪の毛の美しい女が一人波打ち際に座っていた。声をかけても黙ってぼんやり沖を眺めている。疲れた様子なので太夫は彼女を背負って村に向かうが、女は途中で亡くなりその場に神として祭ったという。

かつて硫黄島では名前のわからない女性を穴御前と呼んだので、女は坑野御前(アナノゴゼ)という名で祀られた(B)。その後、一七五八(宝暦八)年に長濱頼母が石祠を建て(C)、御前の命日の六月十五日にお参りをし、豊漁を祈った。お参りは戦後ほぼ途絶え、祠は藪に埋もれようとしている。

なお、現在穴の浜温泉と呼ばれる場所は実は「平家の城下温泉」という名で、本来の穴の浜温泉は集落から見た硫黄岳の裏側に位置する(D)。

思い出話

「立派な祠なのですが、数年前までやっていた正月のお参りも途絶えたと先輩の婆ちゃんも心配しているようです。」

硫黄島地区七〇代女性

